

資料紹介

民芸同人・寿岳文章宛水谷良一書簡（向日庵資料）

高^{*1}木博志

〔解題〕

水谷良一（一九〇一―一九五九年）は、東京帝国大学法学部を卒業後、一九二四年（大正一三）に内閣統計局の官僚となった。一九四四年（昭和一九）に退官するまで、商工省、軍需省などを歴任した（宇賀田達雄「水谷良一氏の業績」『民藝』二〇〇一年二月）。著書に、『労働統計論』（統計學全集、第八卷、東洋出版社、一九三八年）や『赤絵の系譜』（貿易研究会、一九四八年）などがある。柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司・芹沢銈介らと交わり、一九三二年から三八年にかけては民芸同人として、積極的に民芸の会務を担った。水谷は『工藝』誌の個人別記事掲載本数は七一本と、民芸同人でもっとも多い本数を六年間で集中的に執筆した。「小生の昔からの夢は文明批評家たること」と、のちに水谷は語っている（一九三七年一〇月二五日書簡②）。人文・社会科学の広範な読書に裏づけられた見識は、民芸同人たり得た官僚である水谷の人となりで

ある。一九三四年一月には、柳、河井と福岡県の二川焼を訪ね、江戸末期の松や梅の絵の挿絵を示し、彼等は「今後之を手本に捏鉢の内側を昔の様に裝飾すべきことを懇諭」し指導した（二川の陶業「内野喜代治」『二川地方誌』一九三六年）。

敗戦直後に最初に寿岳に宛てて「旧来の自由主義的資本体制に代価するものとして完全唯物論的基脚に於て一つの共産的秩序を打ち出したのがソ聯三十年の歴史」、そしてアメリカとも違う、「超克した第三の立場」を戦後日本がどう打ち建てるかと論じている（一九四六年一月八日書簡⑬）。

半年の浪人生活を経て日本時計工業会理事となった水谷は、平和産業としての時計工業を日本産業再建の一翼とすべく、「日本時計工業の展望」（資料社編集部編『時計に関する資料』資料社、一九

* たかぎ ひろし 京都大学

四八年)という経済・政治を踏まえた現状分析を行っている。興味深いのは、時計の質は、Elegance (優美)とAccuracy (精度)にあるが、「機能美 (functional beauty) ーこゝに時計工業の工芸性の成就があらう」と結んでいることである (一九四六年一月一日付)。また水谷は、寿岳の甥・文明を一九四六年に東洋時計会社へと就職の斡旋をしている (一九四六年八月二九日書簡②)。

宛先の寿岳文章 (一九〇〇〜九二年) は、ブレイク、ダントなどの翻訳・研究で知られる。近代日本の私家本の高みにある向日庵本を妻の静子と手がけ、海外でも評価が高いドン・キホーテの鎌倉武士への翻案である『絵本どんきほうて』 (一九三八年) を芹沢銚介に依頼し出版した。ハーバード大学フォッグ美術館のカー・ケラーの要請によるものであった。また『紙漉村旅日記』 (向日庵本、一九四三年) では消滅の危機にある、九州から東北までの手漉き和紙を採集し「実物貼附」する記録・研究をおこなった。

寿岳・水谷は同年代ということで、民芸運動をリードした柳宗悦 (一八八九〜一九六一年)、河井寛次郎 (一八九〇〜一九六六年)、浜田庄司 (一八九四〜一九七八年)、芹沢銚介 (一八九五〜一九八四年) より、五〜一〇歳年若い。水谷は寿岳に、「吾々三十代の責任と義務」を寿岳に呼びかけた (一九三七年六月二三日書簡①)。水谷が、同世代として寿岳に書簡の中で率直に苦衷・悩みを語り、欧米の読書体験や政治や学術への体験を語っているのも肯ける。

*

向日庵 (向日市上植野町、寿岳文章旧宅) に残された寿岳宛水谷書簡で興味深いのは、第一に一九三七〜三八年に柳・河井・芹沢らの作家の経済感覚のなさをなげき、柳の民芸論への批判をした書簡であり、この間の『民藝』の方針に深く関わった水谷と柳との齟齬がみてとれる。第二に本特集号の玉城論文にあるように、寿岳文章の『紙漉村旅日記』 (一九四三年) 刊行に向けた一九三八年度の全国調査において、水谷の官僚ネットワークにより府県の担当者を紹介する書簡、第三に一九四〇年五月のハワイとメキシコから宛てられた書簡、そして第四に敗戦直後の価値観の変動の中で、政治・思想を論じた書簡である。一九四一年の日米開戦から四五年の敗戦に至るまでの、民芸同人の知識人・官僚である水谷の世界観とその葛藤が興味深い。

第一の問題、一九三八年で水谷が民芸運動から身を退いた理由を詳しく考えたい。書簡群からは、宇賀田論考がいうように官僚生活の忙しさだけではなく、柳を始め民芸同人の年配世代との齟齬が読み取れる。

柳・河井・浜田に対して、「財政難は三老 (柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司) の浪費癖をして進退両難に陥ら」せるとし、一九三七年度上半期の赤字を水谷を含めた四人で等分したとある (一九三七年六月二三日書簡①)。そして民芸運動が「見透しなして買った作り作ったり作らせたり買はせたりは暗夜の模索に均しい」と、水谷は「三老」に説いたとする。また「民芸運動も結局は今日及明

日の産業の上にも、これからの日本人の生活の上にも、結局暗示以上の効果は有ち得ない」とした。この民芸が産業上に役立たないとする意見は、京都において民芸同人の河井や大阪毎日新聞京都支局・岩井武俊が、農民の産業振興と結びつく農民美術運動を批判していた思潮への異議ともなる（青江智洋「近代京都の農民美術と民芸―副業を奨励した二つの運動」高木博志編『近代京都と文化』

思文閣出版、二〇二三年刊行予定。また「柳氏の増長慢無教養一寸救ひがたき」とし、兎に角「お山の大将」「学習院での秀才」と評する（一九三八年一〇月三日書簡④）。柳が主導する民芸運動への水谷の不審は敗戦直後にも続き、柳に会って「栄養失調の上、不勉強と来てゐますので、気の毒だがあの人もおしまひ」と手厳しい。戦中は大政翼賛会と結びつき、戦後もメディアに乗ってゴッホ、カストリ文化、山下清と旺盛な研究を進める、式場隆三郎の「俗物根性」と柳は「悪因縁が切れない」と評した。そして「デモクラシイの時代にこそ吾々は^(質)をかたく守って行きたい」とした（一九四六年一月八日書簡⑬）。

水谷が『工藝』の編集から身を退く前後の事情を、『工藝』に即してみた。一九三七年一〇月二五日書簡②には、「中村直勝氏の「工芸的な文字」論凡そ下劣の極み、史観の貧困未だ之以上のものを知らざる有様で実はその号出るや小生は嚴重な抗議を柳〔宗悦〕叟に呈しました」とある。これは中村直勝「工芸的な文字―歴史的考察を主として」『工藝』（七九号、一九三七年九月）掲

載の論考のことである。中村は「万人に判る―といふ事は、個性が無い、と言ふ事であり、個性が無い、といふ事は、それが即ち工芸的である」と述べ、維新期の京都「本隆寺牛王宝印」を「工芸的な文字」の頂上と論じた。それを柳は「挿絵小註」（『工藝』七八号、一九三七年八月）で「起請文二種」として「純日本化された体に逢ふ」と中村を賞賛していた。

一九三八年六月六日書簡③では、「最近「工芸」の為（鳥取工芸覚書）といふ悪口一くざりと、大兄丈に御覚えの芽出度い（工芸随想其の三）を書き上げました」とある。『工藝』（九二号、一九三八年一〇月、鳥取新民芸号）所載の水谷「鳥取工芸覚書」では、吉田璋也がつくった烏賊墨のセピアインクの改良過程とともに、染織・木工の活動を紹介する。水谷の「悪口」の中身は、茶道をめぐる柳への批判でもある。牛戸窯をはじめ陶器の指導を評価しつつも、「生活から遊離」した「富豪の道具茶」を批判し、「比較的素直な形の茶碗を今日の点茶方式の中に取り容れさせる」という吉田の抹茶尊重の茶道を批判する。そして吉田の「因州雑菓の指導」は、「染分^{あわび}や流釉の皿」の価値こそを特筆すべきと論じた。最後に、鳥取工芸における、河井・芹沢のような「才能」の不在を指摘する。同号で、寿岳は吉田に宛てて「民芸運動の将来―私信にかへて」を記し、ロマン主義の属性でもある「峻厳な個性主義の高峯から下りて、銚かけ屋や左官と水準を同じくする平面に立つ必要」を説き、柳の説く「用に即した美をもつ伝統主義的な

作物が本格」と論じた。また水谷（此木喬）「工芸随想（二）」（工藝）八九号、一九三八年八月）でも、「初期の茶人達の功績」の過大評価とし、彼等以前から「民衆に依つて同一物へのより素直なより無意識的な受容と観照とが儼在」したと、茶道の「実践と直観との根抵」は民衆的な文化の底流の上に成り立つと論じた。そして水谷は寿岳に宛てて、「要するに「茶道を想ふ」要なきこと、今日の民芸運動の弱みはまだ茶道に対する媚諂が絶ちきれない所に在ることを書きたかつたのです。柳さんが御題目のやうにもち上げる「茶祖」「初期大茶人」なるものも一皮剥けば金持町人の太鼓持ちでしかなかつたことを明にしておきました」と述べた（一九三八年六月六日書簡③）。つまり水谷の吉田批判には、柳の茶道論への批判が根底にあることを明言していた。また一九三九年一月一六日書簡⑥の「一人功成り万骨枯れて」との評も、柳への批判とされる。

一方で、『工藝』八一号（一九三七年一月）は、水谷良一の編集号であり、彼の個性がよく出ている。表装は全面、鈴木繁男の漆絵で掩われひときわ質感がある。棟方志功「版画道」、柳悦孝「能衣裳・丹波布・コプト」、エリック・ギル「芸術と産業主義」を長谷川進と共に掲載した。また志功・悦孝ら「若き工人と語る」は、柳が見いだした河井・芹沢・浜田ら、すなわち水谷・寿岳より一世代上の民芸創業者達に対して、二〇世紀生まれの民芸同人への応援歌となっている。

第二に、寿岳の『紙漉村旅日記』執筆に向けて、水谷の官僚ネットワークである府県商工部局関係者を紹介した。そのことにより、寿岳の紙漉の効率よい調査が可能となった。彼ら県の役人が、直接の担当者や地域の有力者や紙漉職人に連絡し寿岳調査のお膳立てをした。

書簡において、一九三八年一〇月の鳥取・山口・広島府県調査では、担当者を「昔なじみの統計家」で「皆手塩にかけて育て上げた人々」だと紹介している（一九三八年一〇月三日書簡④）。一九三九年三月の徳島・高知・愛媛の調査でも寿岳は県の役人を紹介されるが、寿岳は愛媛県の統計課長・村井信之を「温雅な人柄」と評し、刺身と山菜の「テイレギ（オオバタネツケバナ）」、「坊つちやん団子」、伊予柑などに舌鼓を打った（一九三九年一月一六日書簡⑥、『紙漉村旅日記』一九三九年三月二七日条）。また柳宗悦らの沖繩調査では、県の学務局長・山口泉を水谷が柳に紹介したことがわかる（一九三九年一月一六日書簡⑥）。山口は、紙漉和紙の民芸運動のきっかけとなる「小川の和紙」（『工藝』五九号、一九三五年一月）の調査を、埼玉県商工課長時代に、柳・水谷にお膳立てしていた。沖繩県学務部長から内閣情報部書記官となっていた山口が書いた「沖繩の文化的動向」（『月刊民藝』第一巻第八号、一九三九年一月）では、沖繩の文化の「独特なものうち」価値のあるもの、健やかに延びるものを検討するとしながら「言語の問題」や「衛生思想の普及」を指導すべきと論じた。それが「強

力なる日本精神表現の現実的手段」になるとみた。方言論争における柳の立ち位置と山口は異なる。戦後は公職を退き、一九四七年に、杉並区に「いづみ工芸店」を開いた（萩原茂「山口泉と民芸運動」『民藝』五四七号、一九四八年七月）。

第三にかかわり、一九四〇年二月のハワイとメキシコ・タスコからの海外視察旅行の便りに関わり、『月刊民藝』（第三巻第四号、一九四一年五月号）には、水谷・柳・芹沢・浅野長量・棟方・浅沼喜実・式場出席の座談会、「水谷良一氏に南米の近況」が掲載された。アメリカでの河井・浜田展の好評を伝えるとともに、柳が褒める皿の「高台のザラザラ」が実用に耐えず、家具を傷つけると批判している。またタスコは「工芸の町」であり、商工業省の工芸調査として重要であるとして、銀細工・木工・編み籠・ホームパンなどを紹介している。

第四にかかわって、敗戦直後、水谷自身の冷戦分析からは、朝鮮・中国などに投資した資本が回収できないことが、戦後の日本経済への桎梏となっていることを水谷は指摘している。帝国日本の経済体制から一九五五年頃からはじまる高度経済成長によって植民地抜きで戦後の経済体制を確立する前、その日本の状況への元官僚による鋭い観察である。「四百数十億の日銀券の半ばは在留の支那、朝鮮両民族の手ににぎられ、正直な大和民族は其の重圧下に呻きつゝ、」あるとした（一九四六年七月一八日書簡¹⁹）。ただしそこには植民地支配される側、朝鮮・中国からの視点はない。

興味深いのは、一九四六年四月二五日書簡²⁰の「近日中に「新しきトルコ」の訳者（佐藤莊一郎）の手で F.Tonnies, Gemeinschaft（協働社会） und Gesellschaft（利益社会）の完訳が出来上ります」の一節である。調査研究動員本部編『新シキトルコ』（調査研究動員本部、一九四五年、上下巻）はガリ版刷である。

寿岳が一九四三年四月二四日から戦時下、戦後と書き続けた読書録である『癩祭祀』（向日庵資料）のなかで、『新シキトルコ』の読書感想（一九四六年二月七日付）が記されている。寿岳文章へ「敗戦日本の今後の行き方について大いに参考になる」として、水谷が送付した、一般には公刊されていない謄写印刷の『新シキトルコ』を通勤電車で読了している。「敗戦のトルコから、ケマル・パシヤが、正義・人道を糊塗する協商国側の武器を奪ひとつて、ギリシアののど首に擬し、民族国家を押し強く樹立して行った経過はたしかに日本の参考とならう」。アメリカの正義や人道といった概念の虚偽性に惑わされずに、日本が「民族国家」をいかに創り上げていくか、といった寿岳や水谷の模索が読み取れる（高木博志「一九四〇年代の寿岳文章―日本主義と民主主義」前掲『近代京都と文化』）。

なお訳者の佐藤莊一郎には、アドルフ・ヒトラー『ナチとは何か』（青年書房、一九三九年）、ハウスホーファー『太平洋地政学』（太平洋協会編訳・佐藤訳、岩波書店、一九四二年）ほか、ノヴァーリス『夜の頌』（外語研究社、一九三三年）の翻訳もある。ハウスホー

ファアの「地政学」はナチス・第三帝国の領土拡張の理論的指針となった。日本では小牧実繁が、『日本地政学宣言』（弘文堂書房、一九四〇年）において「世界新秩序建設」のための「日本地政学」へと展開させた。そのドイツ地政学との違いは、「皇道実践の中心は実に天皇」が在るとの道徳論である。戦時下における水谷の官僚としての営みやネットワークがうかがわれる。

水谷は、一九四六年八月一日書簡^⑩において、大政翼賛会の調査研究動員本部・理事の職にあつたとしている。調査研究動員本部は、アジア・太平洋戦争を勝ち抜くため、一九四四年五月一日に、「政府ト緊密ナル連携ノ下ニ主トシテ民間ノ行フ調査研究ノ成果ヲ総合的ニ動員スル」方針のもと設立された。水谷良一は、「主要職員名簿」（一九四四年九月一日付）に総務室主査（兼）参事、第一部長参事と記された（柘植秀臣『東亜研究所と私―戦中知識人の証言』勁草書房、一九七九年）。また鉄道畑を歩いてきた総裁・大蔵公望の日記によると、空襲による調査研究動員本部の焼失を受けて、一九四五年五月二八日に金森徳次郎理事らとともに水谷が成城の大蔵邸へ善後策の相談に訪れている（『大蔵公望日記』第四卷、内政史研究会・日本近代史料研究会、一九七五年）。

*

一九四五年敗戦を通した「民芸」は不変であるとの思潮により、水谷『赤絵の系譜』（一九四八年）では戦前の論考をそのままに載せる。その一方で大政翼賛運動への自らの親近性や関わりは語ら

ずに隠蔽する。そのことは、積極的に『月刊民藝』で大政翼賛運動としての民芸運動の旗ふりをした式場隆三郎や和紙の戦争利用に奔走した上村三郎から、戦争へと向かう体制や思想状況に違和感をもちながらも日本主義の影響を受けていた寿岳文章や柳宗悦まで、民芸同人に濃淡はあれ共通する。

一九四一年三月に日本民藝協会は、昭和書房から民藝叢書（第一巻・柳宗悦『民藝とは何か』、第二巻・式場隆三郎編『琉球の文化』等）を刊行するが、その趣旨に「民芸論の提唱以来、いろいろな困難にも遭遇しましたが、今や新体制下の国民生活は民芸を最も有力なものとして採用するに至りました。地方文化の興隆、健康な国民生活は民芸を基礎とすることはいふまでもありません」と説明していた（『月刊民藝』一九四一年五月号、広告）。一九四五年八月五日を境に、民芸の戦時下の言説は、新体制運動に動員される「大衆」を戦後民主主義の担い手である「民衆」と置き換えるだけで、民芸は戦前・戦後と「不易」であるとみなした（高木博志「一九四〇年代の寿岳文章―日本主義と民主主義」前掲『近代京都と文化』所収）。

民芸の敗戦体験における「強さ」と「怖さ」であり、水谷・寿岳、そして柳にも通底する。

（備考）「一」は注釈者による補いである。句読点は原文に従ったが、一部を補った。旧字は新字に改めた。なお本稿執筆に際し、ジョン・ブリン、玉城玲子、安国陽子諸氏のご教示を得た。

〔翻刻〕

①一九三七年六月二日書簡

御葉書拝見。色々御勞はり難有く存じます。御令弟のこと帰来早速紹介しました所目下欠員なしとの返事に接しました。欠員生じたら通知を受ける手配にして置きました。他にも一、二当っては見ますが、こちらの自尊心を傷つけないやうに補助を受ける途を講じたいと思つてゐます。仲々見附け難い無力を歎じてゐます。御上京からお俟ちします。和紙の御研究には心からなる協力を惜まない考へでゐます。小生保有の文献は悉く貴兄に捧げても何の心残りありません。

先日來河井翁上京。忙しい思ひをしたことです。貴兄に出した拙文を盾にとつて突撃し、之に浜老の狡猾極りなき援助あり、撃退に骨の折れたことです。三老（柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司）の強心症はいよく以て昂進してゐますが、極めて因果なことに財政難は三老の浪費癖をして進退兩難に陥らしめてゐます。

今夕小生を加へて四人で財源捻出は各自平等分担として上半期の浪費の一部を尻ぬぐひしました。併し何とかしなくては、今に全部破船の危険あり、こゝで一つ締めたいと念じてゐます。永年の経験で人の向背離合も略々判つた筈なのに、三老の強心症は自らを盲亀の闇にさそひ込んでゐます。小生独り痛心の極です。

民芸運動も結局は今日及明日の産業の上にも、これからの日本人の生活の上にも、結局暗示以上の効果は有ち得ないものと考へま

す。此の見透しなしで買つたり作つたり作らせたり買はせたりは暗夜の模索に均しい。昨夜も此の道理を三人に説きました。聡明な浜老は早速承認の意を表し、河翁も柳叟も一言半句なし。心中不足ながら抗弁の辞も見附からなかつたのでせう。

併し何と云つてもあの三人の素晴らしさには抵抗出来ません。実は小生の如きはあの三人の捲き出す力に一番敬明してゐる一人でせう。併し匡す所は匡したいし、外れた所は戻したい。そして案れと外れとを匡し戻した所を吾々より更により若き青年層に伝へて行きたいのです。茲に吾々三十代の責任と義務とを感じてゐる者です。あの三人から雑音を除いた調子を、あの、三人から汚点しみを取り去つた白布を素直に〔柳〕悦孝君達に授けてやりたいと思ひます。

芹沢兄の「どん・きほうて」リーチより浜老にあて手厳しい抗議ありし由——吾々は反省しなくてはならないと思ひます。柳さんが帰納した概念の上に逆立ちしてユウトピアン・クラブトに墮してはならないです。「どん・きほうて」出版直後之を敢て貴兄にお伝へする小生の苦衷御察し下さい。長く書きました。御退屈さま。

六月二十二日夜半

良一生

寿岳様

本夕寛叔害老相伴つて熱海に去る。

御令閨よろしく。向日庵の昼飯は小生の血とも肉ともなつ

てゐます。

②一九三七年一〇月二五日書簡

〔封筒裏〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「十月二十五日 東京代々木二二五 水谷良一」

御手紙難有。あの中に書かれた凡てのこと悉く同感です。中村直勝氏の「工芸的な文字」論 凡そ下劣の極み、史観の貧困未だ之以上のものを知らざる有様で実はその号出るや小生は嚴重な抗議を柳叟に呈しました。あんなものなら式場兄の書くものの方が才幹がある丈けましたと思はれます。

柳叟も京都市芸会に対しては前々から失望してゐられましたが、今度のことも尊兄其他から承り、大体察知してゐられるやうです。それにしても大人の御努力に依り又嬉しい一号の出来上ることとたのしんでゐます。ロシアの最近の工芸に付ては例のジイドの旅行記以外には何も知りません。俟たれます。

村岡（景夫）兄も同志社ゴタ／＼で弱つてゐるでせう、もつと時流や派閥から超然として全人類的な仕事に向きあつて欲しいものです。「工芸」は吾々のやうに文化の全面に対して志を抱く者にとつて一番いい機会なのですから、村（岡景夫）兄も今之を活用する途に出ないと本当に損だと思はれます。一つ尊兄から活を入れてやつて頂きたし。至囑／＼。

八十号の柳叟の仕事本文のマンネリズムに較べ、挿絵の仕事の素

晴らしさ。秋晴れの空に富嶽の麗容を仰ぐ心地です。今民芸館秋の会仲々賑々しくていい、心地です。蒲田の仕事が一番光つてゐます。

タルカの御努力を買ひ得るものは少いでせう。浅沼（喜実）兄は二号で棒を折つてしまひました。文学者崩れにして然り。僕には大人が翻訳の中で愉しんでゐられる姿が目に見えて実に愉しいのです。タルカで実は大を勉強してゐるのです。あまり早くよむのが惜しく一時間宛かゝつてよんでゐます。速読主義者が極度の遅鈍な読者と化してゐます。先日一寸「英語講座」を耳にして声がかけたくなりました。

時流から遠い仕事をしてゐる小吏には、時局の前途が少しも見透せません。「工芸」の問題以外には彼ら盲になりかけてゐます。併しこれは決して悔ひの残らぬ生き方と知りました。

小生の昔からの夢は文明批評家たることでした。今後は此の夢の実現を工芸史を通じてゆつくりやつてゆきたいと決心がつきかけました。仲間中で一番金に縁の遠いパートを受け持つて行く決心がつきかけました。中村氏の歴史性の貧困否欠除が歴史のアマツール（愛好家）に歴史への野心をあほります。

段々すきな秋が深まつて来ます。奥さんに心からよろしく

十月二十五日

良一生

寿岳様 座右

③ 一九三八年六月六日書簡

〔封筒表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「東京代々木山谷二二五 水谷良一」

昨日宗理兄来訪

「永遠の福音」⁽¹⁾正に拝受しました。難有く存じます。何よりも本は読むものと心得てゐますので、ゆつくりと初夏の夜を一緒にすごしました。本当にいゝブレイクに逢つた想ひです。装本のこゝと、越前のいゝ手漉と朝鮮麻とがしつくりと恰好し、愉しき限りに感じます。活字の選み方もインクの拭り方も御主人の細やかな心づかひがひし／＼と心を打ちます。宗師の題字は如何なものですか——絲菟蕪を綴合せた感じあり。あまりにも自己の理論（個性を超えた文字）に忠実なりし揚句少々腑抜けになつたのではないですか。柳さんはつく／＼作家でないことが判りました。光悦の高さが仰がれます。（御内密）

小生商工畑に植えかへられてから恰度一月。然るに此の牛蒡、足を痛めて先週一週休んでしまひました。靴づれから黴菌が入つて拇指の横はれ上りつひに切開してしまひました。御蔭で内観の機は得たし、民芸館騒動は浜老から報告をきくだけで現地には戦ふ要なく、本当に儲けものでした。大体平癒今日から神妙な小役人に歸りました。役所毎日／＼法律づくめでいよ／＼家庭では工芸のモクタレ虫と化してゐます。最近「工芸」の為（鳥取工芸覚書）といふ悪口一くざりと、大兄丈に御覚えの芽出度い（工芸随想其

の三）を書き上げました。せめて後者だけはおよみすて下さい。

文に凝つて四回程書き直しをしました。要するに「茶道を想ふ」要なきこと、今日の民芸運動の弱みはまだ茶道に対する媚諂が絶ちきれない所に在ることを書きたかつたのです。柳さんが御題目のやうにもち上げる「茶祖」「初期大茶人」なるものも一皮剥けば金持町人の太鼓持ちでしかなかつたことを明にしておきました。徐々に柳美学の補修と柳無学の補強工作とを施して行きたいと思つてゐます。

段々暑くなりました。

御一家御健祥祈り上げます

良一生

六月六日深更

寿岳様 硯北

(1) 『永遠の福音』（向日庵本）一九三八年五月一日発行、限定八

〇部（大久保久雄・笠原勝朗編『寿岳文章書誌』寿岳文章書誌刊行会、一九八五年）

④ 一九三八年一〇月三日書簡

〔封筒表〕「京都府乙訓郡向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「十月三日 水谷良一」

御手紙拝見鳥取山口広島へは此の手紙と一緒に依頼状（予定表同封）差出しました。商工課長とも思いましたが六大府県以外の商

工課長には商工省は縁がうすいのでやはり昔なじみの統計家に頼みました。皆手塩にかけて育て上げた人々です。

内山口の西村氏はあまり深くなく且多少の酒癖あり、これは通り一辺の案内にして下さい。

広島の皆川君は温厚の深切者、嘗てリーチ、柳、河、浜の連中も厄介をかけました。大いに積極的に世話を受けて下さい。

鳥取の坂口四郎次これは小生と密接の關係あり、昔から一しよに仕事をしてきた仲です。大いに世話をさせ、凡ゆる厄介をかけて何等差し支へありません。

東京のこと河井翁色々御配慮の由、悪いことだらけで閉口してゐます。吾々の至らぬ点も反省したいですが、協団の工芸の徳用を讃へた人が我執を去れないこと——謙虚の美を最先に説いた筈の人が虚飾につきまとはれてゐること、これがいつもくもつれのおこる因です。今度の「工芸」〔一〕に至つて柳氏の増長慢無教養一寸救ひがたきに至つたことを知ります。漢文句調の形容句が悉く概念に墮したものだと言ふ断定——これは偶々柳さんが漢字をつかひこなせなかつたこと↓漢文口調で云へば漢字消化力の欠缺を暴露する丈で何も柳さんの兎の糞のやうな大悪文だけが実感的だと云ふ証拠にはならないと思ひます。兎に角「お山の大将」「学習院での秀才」を清算しきれない内は仕事は大きくならないと思ひます。ひとりよがりの感傷論よりも実践が大切だと思ひます。段々皆が背いて行くことは必然だといふ気がしてなりません。

先は御答へまで

十月三日

水谷

寿岳様 侍史

〔一〕『工芸』九〇号（一九三八年六月）の「編輯後記」。柳は「昔の美術評論家は、ものを賞めるには、むやみと形容詞を使ったものである。（実は今でも其の傾向が残つてゐるが）、それが漢文句調で、「神韻缥缈」とか「雄渾無比」とか月並な文句をならべる」として、なるべく形容詞を使わず語るのが「本もの」と論じる。また「理論からしたり系統から見たり」する美学者も批判する。

⑤ 一九三八年二月四日書簡

〔一〕（別府名所）鬼石坊主地獄珍現象、坊主の發生（絵葉書）

〔葉書宛名差出〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様

於別府

良一生」

御葉書難有漬物難有、只今九州旅行中、鹿児島に行つたら（十六日頃）カルカン送ります。二十二日早朝上洛、あひたし、話したし、嘆きたし、怒りたし、而して喜びたし。

⑥ 一九三九年一月一六日書簡

〔封筒裏〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「一、一六 水谷良一」

令夫人御病氣の由お寒い折柄御加養專一祈り上げます

昨冬祖母、姪、弟嫁と近親三人一ヶ月の中に他界し、東京では子供二人猩紅熱にやられ二人とも今猶腎臓併発で入院中、いやなことのみつゞいてゐます。

御手紙により早速愛媛（村井君）、高知（松本君）、徳島（笹森君）に照会。此等の人々から直接御返事差上げるやう頼んでおきましたので日ならず何かの音さたあるものと信じます。

例によって困つてゐるのは芹沢氏です。向日版の方で何とかしてやつて頂けませんか。小生の方でも浅沼兄と相談中です。

一人功成り万骨枯れては吾々の志と違ふわけです。併し民芸ウインドウの現況は正にかくの如し。

近頃の本の中で「チボー家の人々」仲々感心しました。続刊がまたれてなりません。最近シヒターと云ふ人のかいた「商標法史」一冊小生の手で完訳。中に意匠——書物意匠のことをかいた一齣があります

若し御入用なれば其の部分だけ（小生の拙訳で差支なければ）一部タイプライタアにして御送付申上ます。ご一報下さい

今又々ゴルフに熱を上げかけました。此の病氣再発のこと故今度はいよいよの良薬のないがり癒りますまい

棟方元氣、相かはらずわけのわからない絵をかいてゐます。上宮太子の一代記を版画にしたいと申すので、今せがまれてシナリオを書く準備中です。物故した近親への供養と思つてやつてゐます。山口泉（沖繩学ム部長）来り、柳老を国賓待遇で迎へた由報告。

却つて独尊的矜持のみ昂まるのを惧れます。

何分令夫人の御病氣退散祈り上げます

小生の方も二児の加養何より以て大切です。

いづれ又

正月十六日

水谷良一

寿岳様 侍史

⑦一九三九年四月二四日書簡

〔封筒表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「代々木山谷町二二五 水谷良一」

先日は令夫の御翻訳御送り下さいまして難有く存じ上げます

三月十四日父の死に逢ひ三月一杯家郷で整理にくらし、四月に入つてからも土曜日曜毎に帰省して家事を見たり、家族に病人が簇出したりして、まだ折角の御本がよんでありません。心にかいづ、も御礼がおくれて申しわけありません。病中富美子も昨日退院しました。人事多忙を極め親なきあとの混乱になやまされつゞ

けです

早く整理を終つて書斎の生活に入りたいと念じてゐます

三月下旬から四月上旬かけ代用品奨励の用向で兵庫岡山広島をめぐりありくことになりました

貴地には往還の途すがら立ち寄らせて頂きたくいづれ河井さん方から御電話申し上げます 久方ぶりでのお目もじ待たれます

奥さんにくれぐれもよろしく

四月二十四日

水谷良一

寿岳様 侍史

⑧ 一九三九年一月二日書簡

〔封筒表〕「京都府乙訓郡向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「十一月二日夜 水谷良一」

御手紙難有。こちらは大いに考慮して大の骨折りたいと思ひます。どうせ田沢君は十一月十二日横浜出帆故、誰が所長になつても後からの赴任以外に方法はありません。之に付本局水野技師来る十二日頃より十六日頃まで京阪神に出張、本件に付其の期間に一度河井老の下にて大兄と落ち合ひ談合するやうに手配します。何卒よく御考へおきの上同技師と御懇談十分貴意のある所御示し頂けば幸甚です。先は不取敢御返事まで。

十一月二日

良一生

寿岳様 侍史

(一) 所長とは、『寿岳文章日記』(向日庵資料) 一九三九年一〇月二五

日条の記述から、水谷良一が寿岳文章をニューヨーク貿易局支局所長への就任を誘つたことを指すと考えられる。

⑨ 一九三九年二月一六日書簡

〔封筒表〕「京都市外乙訓郡向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「十二、十六 水谷良一」

御手紙により九州七県課長へ全部自筆で依頼しました。あ、肩こりにけり。何れも小生旧部下土地案内の人々。就中鹿児島、熊本、大分は小生の息か、りし子飼の者共。必ず十分好意を示すこと、信じます。長崎は好人物、佐賀は一寸生イキです。福岡は課長よりも古賀属をたよられたし。紹介状同封。

奥さんによろしく。紐育のこし今折角工作中です

十二月十六日

水谷良一

寿岳様 侍史

⑩ 一九三九年二月二七日書簡

〔葉書宛名差出〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 二月二

十七、水谷良一」

紙業行脚記面白く拝見。浜田氏の文章歯切れはい、がもう一行よんで皆判る気がしたのです。柳氏の「哲学者と哲学の学者とは違ふ」云々よむ方で顔赤くなる、あ、く

⑪ 一九四〇年二月六日書簡

〔ハワイ先住民の婦人の絵葉書〕

〔葉書宛名差出〕「Mr.B.]ugaku Kobe, Japan 京都市外向日町上植

野 寿岳文章様 [PAQUEBO San Fran. Calif.]

ヒロに寄港。例の火山を見物、ホノルルよりヒロの方が面白く感じました。ホノルルでは布哇大学も見ました。先づ同志社程度です。御健祥祈り上げます。

十二月六日 水谷良一

⑫ 一九四〇年二月二七日書簡

〔メキシコ・タスコのサンタ・プリスカ教会の絵葉書〕

〔葉書宛名差出〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 Sir.

B.]ugaku Kyoto Japon 在メキシコ市 水谷〕

十二月二十五日

十八世紀の鉦山成金ポルダ一建立のタスコの寺院。タスコの町は同時に工芸の街です。併し品物は土産物化して見る影もなし。メキシコ市を歩いて見て古道具に欲しいもの沢山。併し旅の身、而も空の旅の身。かへません。

⑬ 一九四六年一月八日書簡

〔封緘葉書表〕「京都市乙訓郡向日町上植野（西向日）寿岳文章様

平安〕

〔封緘葉書裏〕「東京、世田谷、北沢4の363 水谷良一」

御葉書なつかしく拝見。年末には行けませんでした。が来る十九

日が亡妹の四十九日故其の前後に一寸入浴して御目もじしたく、名古屋の醤油も御期待下さい。御期待下さい。多分二十日の日曜にでも貴宅訪問の予定。ドイツ書物道の本、一両日中に明治書房に送るやう申しつけます。

○先日柳老訪問。栄養失調の上不勉強と来てゐますので、気の毒だがあの人もおしまひです。式場君との悪因縁が切れない以上、あの先生も未来永劫駄目と考へてゐます。民芸館も完全なコンヴェンションナリズムに墮してしまひました。過去の自己を模仿してゐるやうでは一切の創造はありません。柳氏も^①の方が思ひきれない中は、再びつけあつてゆけさうもありません。今では式場君の俗物根性がしみついてしまつてゐます。時候におそしの感。デモクラシイの時代にこそ吾々は^②をかたく守つて行きたいものです。

○十二月以来全く浪々の身の上となり、静かに国家の将来を想ひ、民族の命運の上を按ずる機会に恵まれました。尤も新政研究会と云ふ私設の調査団体を同志と共に主催してゐますので全く out of employment ではありませんが、公務からは身を退いてゐるので、自由に読書と思索とに耽ることが出来ます。最近の観想の結果として、旧秩序の完全崩壊の上に新秩序の建設を必至の要請とする点で、日本は正に世界的変革過程の先端を表徴するものと思はれます。旧来の自由主義的資本体制に代償するものとして完全唯物論的基脚に於て一つの共産的秩序を打ち

出したのがソ聯三十年の歴史であり、他方首尾一貫性を欠きつつもより人間的な自由主義乃至民主主義の集団文明メカニズムを打ち建てて行くのがアメリカ体制であり、世界史の課題は兩者の何れがより卓れた荷担者となるかに在ると思ひますが、更以上の外に之等を超克した第三の立場が在り得るか否か、問題点です。あり得ないとすれば吾が民族の前途は何れかの Leviathan に呑み込まれてしまひさうです。こんなことを近頃考へてゐます。

⑭ 一九四六年四月一九日書簡

〔葉書表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 419 東京、

世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

○例のメイン・キャンプ おくればせながら本日御送りします。

○養徳叢書⁽¹⁾の人 上京あれば、中山〔伊知郎〕君〔商大〕、大河内〔二男〕君〔東大〕、矢部〔貞治〕君〔東大〕等 経済、社会政策、政治の方の一流中の一流人御紹介します。

○Sidney & Beatrice Webb (the Webbs) か光悦なら小生引ひ受け差支なし

(1) 一九四四年に設立された養徳社は天理時報社に本社があり、新村出との関係も深いことから、寿岳がかかわったと思われる。養徳叢書として、一九四五年三月から敗戦の八月までに、高浜虚子「斑鳩物語」、水上瀧太郎「父となる記」などが刊行された(福家崇洋

「養徳社の誕生―戦時期の奈良と出版文化」奈良県立大学ユーラシア研究センター編 『奈良に蒔かれた言葉―近世・近代の思想』京阪奈情報教育出版、二〇二二年。

⑮ 一九四六年四月二五日書簡

〔封筒表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 平信」

〔封筒裏〕「四月二十五日 東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

四月二十五日

寿岳文章様 東京 水谷良一

京師から帰つて後、腹工合あしく、とちこめて何くれと且よみ且思ふ生活を送つてゐます。ブランデンブルグの「近世ヨーロッパ史」をよみ返してドーンソンより手広い理解力に驚きを新にしてゐます。ゲーテの「詩と真実」も幾たび目かを通して新しい泉のやうな気がしてなりません。全然別個の方向のものですが、新渡部博士の「米國建国史要」と云ふ本を手にして昔の物識りの軽蔑し難い消化力に驚きました。今の学者の狭隘な知見の程があらはれてなりませんでした。

ヒットラーの「メイン・キャンプ」⁽²⁾の正訳御送りします。こんなものを今更と思はれますかも知れませんが、敢て送ります。憎悪から生れる仕事か如何にはかないかをしじみ感じない訳には行きません。

令夫人の追想録⁽³⁾——一人の真面目に人生と取り組んだ女性の美しい魂の告白、どうか発表の方式などは考へずにあのみ、御書

きつゞけになり完成せられんこと心から祈り上げます。

近日中に「新しきトルコ」の訳者〔佐藤莊一郎〕の手で F. Tonies, Gemeinschaft (協働社会) und Gesellschaft (利益社会) の完訳が出来上ります。明治書房で出す筈ですが、あの有様では心細く、八雲かどこかに話して見たいとも思っています。例の養徳叢書の本やで出す気がないのでせうか。御序での節御あたり下さい。文楽の方も明治があゝの通故、執筆を中止しようと思つてゐます。

其の中又ひまを見て上洛したいと思ひますが、拙寓も藤浪ゆらぎ下には菫花咲ききそつて 行く春が惜しまれてなりません。向日庵も紫雲棚びきでせう。以上

(1) 『Mein Kampf』(一九二五、二六年)。アドルフ・ヒトラー『我が闘争』上下(東亜研究所、一九四一年)。

(2) 寿岳しず『歳月を美しく』(靖文社、一九四七年)。

⑩ 一九四六年五月五日書簡

〔葉書表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 五月五日夕

東京北沢四ノ三六三 水谷良一

御手紙拝見。例の四冊もの及林語堂(此の方はまづいものです)御手許に着きしか案じてゐます。御令弟の件——炭鉱は考へものです(爆発多し)、一兩日中古河か日、鉱、にあたって見ますが、小生としては金属山の方をおす、めします。何れにしても山の仕事は世間慾をすてた別世界ですから其のおつもりであつて頂き

たし。佐藤氏の Gemeinschaft und Gesellschaft 完訳、目下小生校合中です(1)。おす、めいたゞけば幸甚。

(1) 佐藤莊一郎と水谷良一で、フェルディナンド・テンニエス著 Gemeinschaft und Gesellschaft : Grundbegriffe der Reine Soziologie (一八八七年、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト)の日本で初めての翻訳出版を進めていたことがわかる。

⑪ 一九四六年(九) 七月一日書簡

〔封筒表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 平安」

〔封筒裏〕「七月十一日 東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

寿岳文章様 7.11. 水谷良一

暑い折柄ですが 御元氣 御消光のことと存じます。

国民の思想は落ちつくべき所に落ちつきさうですし、国民の道義も頹廢一步手前で廻れ右の格好と看取し、愁眉いささか開く想ひです。此の愚劣な政治の下、此のひどい食糧事情の下で、而も遅々たる生産秩序の恢復の下で、此のやうな好転を眺めるとき、私は民族の将来に再び美しい夢を描き初めます。

それにしても正しい批判の太道の欠如は痛嘆の外ありません。尊兄の努力で翼くは清純の士を募り、今日の乱麻の如き評論壇に新しい明星を仰ぎたい心持ち一杯です。僕も魯鈍に鞭うつて一翼を荷担します。折角御自愛祈ること切。「世界」——obsolete (時代遅れ)、「中公」——trocken (こまらな)、「饗宴」——浮薄。大兄の奮

起至囑く。

次に調、研、動、本（調査研究動員本部）、解散以来無為にして静観してゐましたが、半歳の沈静を破つて今度草蘆を出で巷の人となりました。親友が商次官になった為、引き出されて俗物の仲間入りをせざるを得なくなりました。今度は実にうってかかつて財界（生産界）の世話役です。時計工業会の理事長と云ふ地位です。此の産業が貿易業界の花形たるべき未来性に溢れてゐること、メーカーが東京と名古屋とに集中してゐること等より見て、従来貿易行政に多年携つた経歴と郷土（僕の郷土は東京と名古屋です）産業の進展をの為一切を擲つて業界の要望に副ひました。東京を本拠として月一回づ、名古屋に帰つて動きまはります。従つて京都にも隔月位には出られさうです。大して忙しいことはありませんが、（何分にも出身省の後輩が応援しますので）日本産業再建に対する小生の目標を小さい時計の一角で試みて見ます。此の業界はまだ労働攻勢がひどくないので一つ実地にoperativeなgemeinschaftlich〔共同の〕なものの樹立を小さく一歩く堅実にきづいて見たいと思ひます。僕の経済政策のIdeal Begriff〔理想的な概念〕の一端が実現出来なかつたらすぐやめます（恐らく止める方が早いでせうが―現実には）時計界の社長重役達は四十台の人が大部分なので何か出来さうです。嘗て官吏時代に助成金をやつたり、補給金をやつて輸出助成をした想ひ出多き新興商品の只中に入つて、今度は自活の途を考へてやらなくては

なりません。

今、俗務から帰つては灯火にヘーゲルとたしんでゐます。僕の気持ちからはシェリングや古くはプラトンの方が好きですが、組織的体系と云ふことになるとヘーゲルとアリストテレーズの王座は揺がないと思つてゐます。Rechtsphilosophie〔法哲学〕をよみましたへ、今 Enzyklopädie とにらみっこしてゐます。次に最近新井白石の「読史余論」をよみ直して前に反感をもつたものですが今度は心から感心してゐます。大した批判的頭脳だと思つてゐます。金森（徳次郎）さんには「読史余論」は充分よましておきましたから憲法論議で間違ひはありません。

御令甥（甥・文明）の御就職の件、其の中東西の時計業界を一度万遍なく巡歴した上、適当な工場を選定して御推薦しても宜しうございます（若し御希望ならば）しばらく御待ち下さい。

八月か九月かに帰名の折上洛、お目にかゝりゆっくり一夕御話し申したく。

奥様によろしく。例の御令嬢の生長日録御完成何かの形で拝見したく。 勿々。

⑩ 一九四六年七月一四日書簡

〔葉書表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様「速達」7.14 東

京北沢四ノ三六三 水谷良一」

御手紙拝見。御令甥（甥・文明）の件、一度御上京の節御目にか、

り、御希望有之ば小生今回関係することとなりし時計の一流メーカーに紹介出来るものと考へてゐます。御急ぎでなくば小生一度東京、なごやの工場を一覧した上御推薦すべき所を考へて見ます養徳社もやること乍ら一調子高い Revue de Revue を御初め下さい。

①九四六年七月一八日書簡

〔封筒表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

寿岳文章様

水谷良一

七月十八日

○御葉書よりさきに昨夜御本人の文明氏（寿岳の甥）御来訪下さいました。御本人にくわしく御話ししましたので大体のことは御聞取のことと存じますが、戦時中時計屋さんは凡て軍需産業に転換してゐた為、今原業に復帰したにしても全体としては整理期であり、且御出身関係より仲々就業はむづかしいと思ひます。其の上天降り重役で業界とのなじみも浅く、もう少し様子も見、小生自身の信用も築いた上で御世話したいと思ひますので、暫く時日を借して頂きました。念頭に置いて何とか機会をねらひ御斡旋したく思ひます。

○新聞の調子が正気をとりもどしつゝあるのに、雑誌特に高級と銘打つ雑誌の無責任な編輯振りに痛憤してゐます。和辻さんの

「歴史的自覚」の大論文がのると云ふので今月の「展望」をひろげて其のつまらなさに一驚し（但し器用なものとは思ひました）、全頁の半ば以上を占める永井荷風の「とはず語り」を通して morality の低さと云ふよりは degeneration の標本を見せつけられ、日本ジャーナリズムの墮落に、至っては呆れてものも云へません。今月の「展望」は家庭の子女には見せたくないで風呂のたきつけに使って灰燼としました。

○政治に誠実さのないのも悲しい事実です。経済はいたずらに悪循環を重ねてゐるのに、因果の連鎖を先づ生活費の釘付けから初めて安定させる勇氣を欠き、石炭の増産を転機に日本経済が軌道に乗ってゆくだらうと云ふ樂觀説を放送する石橋（湛山）君の卑怯にも閉口します。今日のインフレーションは飢餓インフレの特質を有つてゐるので、今から政府が勇断を以て施政し、出来秋までに相当の手を打って国民の信を恢復すれば、思想の安定（国民が多少利口になった結果）と相俟って日本恢復の礎がきづけるものを、惜しい哉廟堂に人なし。畢竟此の内閣も憲法を成立させてすぐ退陣して貰ふ外はないと思ひました。議会后は所詮政党の離合集散をめぐって一波瀾が予想されます。又波瀾がなかったら困ると思ひます。此の点からも Revue の出現が俟たれます。エマースン早く打ち切つて奮起せられては如何。少々榮養恢復しても春秋の加はることは避けられない人の身です。

○半歳 静思の生活から再び俗塵を浴びる身となりましたが、業界が小さい丈にこまごました問題が多く、書齋恋しくてなりません。併し役所も業界も虚脱から一寸抜けたばかりでまだぐテムボがのろいので、小生一人あせるのもつまらないし、自分の時間だけは（食物の少い今日一切の交際をさけて）十分に讀書と思索とに使つてゐます。ヘーゲルは面白く、ゲーテも一生汲み尽せぬ泉ですし、少々俗な所でウェブなど色々のことを教へてくれます。昨夜は徹宵（暑くて眠れぬまゝに）マクス・ウェーバーの *Religionssoziologie*（「宗教社会学論集」）をひっくりかへしては考へました。科学性と云ふ言葉や知性と云ふ言葉が戦中戦後使はれて来て僕自身厭みに思つてゐますが、Weberの合理的精神なら難有く頂けさうです。八千万の民族を此の狭い国土で世界的文化水準と生活水準の上に支へて行くのには、社会面、経済面、技術面、文化面の諸面に亘り結晶的に合理的精神を展開して行く以外の途はないのでは無いでせうか。

○併し最も悲しいのは、支那人と朝鮮人とに日本経済の弱点の勸所をにぎられてしまつて、之に対して公権力を以て断圧することとは勿論、否日本民族の名に於て堂々と正面から抗議することもない祖国の現状を想つて真に涙なき能はずです。敗戦後の口惜しさ様々あれども、之にもまして口惜しいことはありません。四百数十億の日銀券の半ばは在留の支那、朝鮮両民族の手ににぎられ、正直な大和民族は其の重圧下に呻きつゝ、さな

きだに蓄積少き資本下に生ずる零細の分前を争つて労資が口ぎたなくののしりあつて自滅の途を辿つてゐます。敗戦後記に之を逸して歴史的認識を口にする世の学者の迂を嗤ひ且つ悲しみます。以上

②〇一九四六年八月一四日書簡

〔封筒表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様」

〔封筒裏〕「東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

○御葉書拝見。文明氏⁽¹⁾よりの履歴書拝見次第東京のメーカーにあたつて見ます。陸海軍の技術将校で逸早く時計の技師に転業したものの相当数あり、各社の現状と将来とを考へ、最も適当と認める所に御紹介します。今年十一月以降には工業会の輸出検査が初まりますので、当人の希望によっては、又は就職後うまく行かなかつた場合には何れも工業会の支部の検査員に採用すると云ふ条件なら、今すぐにもどこかで引受けると思ひます。僕の考へでは東京時計又は東洋時計又は英工舎の三社中どこかに席を見附ける考へです。時計は形状、文字板、針等に工芸的意匠を働かす余地もあり、機械そのものにも技術革命の余地充分にあり、若いエンヂニアには一寸面白い世界と思ひます。（名古屋は低調で見込なし）

○「展望」九月⁽²⁾候つてゐます。但し河上肇と云ふ人物、正直で真面目で懸命で生一本で好もしい人だとは思ひますが、見解

がかたくなで、視野が狭く、その上世界史的感覺が鈍く、尊敬する気は今の所毛頭なし。大田さんは吉田松陰に比してゐますが、識見に於て、効績に於て（特に教育家としての）到底同日の談でないと思ひます。其の上河上さんの頭のわるさはたまらなく考へます。併しこれは社会科学からの批判で、大兄のやうに別個の接觸面を有つた方の高論卓説に依つて冀くは啓発され度きものです。

○小生時計の理事長の仕事——一年を限つて引き受けましたが、俗務はいやです。打ちこんでやつてはゐますが、そして既に一ヶ月にして可成りの業績を挙げはしましたが、顧みて書齋裡を離れた小生の存在は河童の岡上りで安住の地位ではなく、調査研究動員本部の理事の昔の地位が恋しく思はれて、そろゝに哀愁を感じてゐます。

○「光悦」のこと、書いて見たいと思つてゐます。人間の中と云ふよりも、人としての高度の到達、生活と観想と創造との一枚になつた境涯、更には栖遲と云ふ言葉の意味を十全に実現した過程、一寸西洋にも類がないと思つてゐます。フランクリンがアメリカのよき面を十全に代表するなら、ヴレリーがフランスのエスプリを、ゲーテがドイツのゲニーを、ドストエフスキーがロシア魂をそれぞれ代表するものなら、光悦こそ日本のよき面を包摂してよく産み、よく生きた人だと考へ、彼の棲む高嶺の空気を共に呼吸して見たいと思ひます。従つて京都の本屋か

らでも正式に交渉あれば、すぐにも書いて見たいと思ひます。併し何にしても大兄の手で一つよきRevueの論成を待つや切。

二十一年八月十四日夕

良一生

寿岳様 侍史

(1) 甥文明について、一九四三年八月一三日に寿岳文章は「中学へ入つてから大学卒業まで、ともに暮らしてきた甥を技術将校として応召させた私ども一家も、ただただ国家へのご奉公を念頭いたしております」と述べている（『向日庵消息』第十信、『寿岳文章書物論集成』沖積舎、一九八九年）。

(2) 寿岳文章の河上肇論は、一九四六年二月号『展望』に「私の知る河上肇博士」として掲載された。この論考はさらに加筆修正の上、寿岳文章『河上肇博士のこと』（弘文堂、アテネ文庫2、一九四八年三月）として出版された。寿岳の戦後の出版は、河上肇の顕彰とラングドン・ウォーナーの古都奈良にかかわる文化研究の紹介という形をとつて、戦後民主主義の旗手となつてゆく（前掲高木博志「一九四〇年代の寿岳文章―日本主義と民主主義」）。

㉑ 一九四六年八月二九日書簡

〔封筒表〕「京都府乙訓郡向日町上植野 寿岳文章様 平安 速達」

〔封筒裏〕「八月三十日 東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

○走り書き——御令甥文明子御就職の件、熟慮の末、東洋時計会社の社長、専務、生産部長と懇談の上、採用と内定。昨日大兄宛電報、本日御本人宛電報。既に御本人御出發後と思ひますが、まだならず御出京督促下さい。

○御本人は叔父さんの提案と異り、東京在勤を希望せられしこと第一、名古屋のメーカーは何れも二流のみにて特に推薦すべき所なきこと第二、更に東京メーカー（六大メーカー）中服部は第一位なるも封建的に新しい人を托するの所ならず、其の他のメーカーは感心しない所があり、品格の高さ、事業一家精神の浸透せること等々より考へ東洋をえらびました。勤務地も立川に近い日野工場ですから御本人も具合よろしかるべし。これは watches shop です。大体 watch 特に wrist-watch は clock と異り、技術の精度を必要とし、名古屋には一軒もなく東京でも四社あるのみです。特に都下工場は東洋の日野のみです。wrist-watch の要件は elegance と accuracy とに在り、四社中服部、東洋は accuracy に卓れ、英工舎、大日本時計は elegance に於て優る。従つて文明君が東洋に入られてから、よき技術の錬磨と共に、卓れた工芸家との結合に依り今後 elegance の面に於ても新工夫をこらして驥足を伸ばす余地は十二分にあります。尚 shop の仕事は性にあはないなら、工業会の技師に採用して小生の傘下に置いて宜しいと思つてゐます。

○廿四日発表に依れば服部、東洋、英工の三社は何れも賠償工場の指定を受けました。戦争中 mechanical use の製造に従事した罰と思ひます。併し此等の主力が接收されたら日本の時計工業は首なしの胴体と均しく、目下商工省と協力の上 GHQ に対

し不眠不休の説明につとめてゐます。小生の Pigeon English 「日本人による英語」がとんだ所で役立つてゐます。御憫笑のこと。幾らか助かると思ひますが、万一重要部分がやられても服部、東洋は資本の蓄積もあり、手当に依つては充分立直ると考へてゐますので、苦難期に敢て文明氏を推薦しました。日本産業の再建はどれも苦しい場面が多いのです。併し日本の技術家は此の苦難期を切り抜けて行くものと僕は厚い倚頼をかけてゐます。僕も理事長として此の苦しい場面に処して各メーカーの心の友となつて行きたいと念じてゐます。兎も角も新聞が無責任に書いてあるやうにそれ程日本の工業界は卑怯でも臆病でもありません。苦しい中から新しい技術系列が生れ、新しい経営体系が生れ、新しい経営技能が生れんとしてゐます。僕は今それに一着想を有ち、急々に展開しつゝあります。

○東洋時計では食料も世話をし、宿舎も世話をし、転入にも努力するさうですが、当分の米はもつて御出になるのが宜しいでせう。

○東洋は上野の吉田時計店で服部時計店と双壁で自己資本も充分、帝、銀、とは渋沢栄一翁以来の關係で応接も充分、服部—安田銀行のコンビネーションよりは優つてゐます。其の上、吉田社長は時計界切つての人格者で時計工業会の東京支部長もつとめ、会社経営も社員に厚く、自己に薄く。支部長としても業界に厚く、自社に薄く、小生の最も感服してゐる人物です。小生引出

しに付ても最も努力し、会内でも小生に最も信頼を置いてくれてゐる人ですから、安心して大兄の愛甥を托することとしました。併し全体として縮小再生産過程下に在る日本産業の今日であること想ひ、過大な期待は一切禁物です。況んやレペラーシオン下に在るshop故、華やかなことは凡て脳裡より消し去り、会社も御当人もhumbleな地位から未来の輸出産業として栄える日を夢みつ、精進すべきだと考へてゐます。

○併し俗務に執掌するのいやになつてゐますが、当分はやります。複雑な業界をリードして行くには、小生は公正と誠実だけしか持ち合はせはありませぬ。此の生地で推して見て買つてくれねば引っこむ外ないと信じてゐます。目下日に／＼各会員会社の支持をかためてゐますので、つかれつつも決意をかためて精進してゐます。

○大兄も教職の御身の上、time-keepingの上に新しい正確な時計が御入用なら小生に御下令下さい。よく合せ込んだ正確な誤差の少さのを御世話します。

○最近棟方（志功）の版画集が出ますので、巻頭の跋文をものしました。半歳の彫琢でねり上げましたが、何れ年末出版の上はお目に入れます。

○展望なぞに書くのはやめ、新企画のルヴュー一つ自ら御編輯になること待望します。

829夜 良一生

寿岳老翁 侍史

②一九四六年一月二二日書簡

〔封緘葉書表〕「京都府乙訓郡向日町上植野 寿岳文章様 侍史」

〔封緘葉書裏〕「東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

其の後欠礼しました。小生実は去る十一日、十二日両日入浴しました。何とか尊宅に何つて御目もじしたく念じましたが、同行者の友人との関係もあつて残念乍ら其の機を得ませんでした。御詫びします。正月には必ず上洛（或は十二月中に上洛するかも知れません）。其の節には名古屋から醬油を携へて参ります。帰来多忙な俗務の中をあちこちと動きつゝも、夜はゆつくり電灯をつけて書物にしたしみ、更に工芸や美術のことを書いたものを纏めてゐます。明治書房で出すことにきめ、原稿は一応整理しました。写真版や特に原色版の製版で、行きつまつてゐます。明治書房と約束しましたが同君のスロー・モーションに閉口してゐます。

同君の所に書誌学——特に西洋書物学の小生の蒐集本三冊托してありますが、まだ上洛せず従つて御手許に届いてゐないのは残念です。

今度御葉書か何かで御督励の上送らせては如何ですか。終戦後却つて苦々しいこと多く閉口してゐます。

又御目もじの上万々。令夫人によろしく。

良一

寿岳様 侍史 11.22.

㊸一九四八年（カ）三月二日書簡

〔葉書表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 三、二一 東京世田谷北沢四ノ三六三 水谷良一」

御見難難有。病氣も大体本復しましたが、病後の離職に貯へも乏しく先日も浜田さんに頼んで古い工芸品の貧しい蒐集も身売りの話になり、毎日淋しい暮しをしています。就業の話も急には行かず、当分は家郷の仕送りを俟つ身の上。自信力をすりへらしてしまつて困窮の中にしばし耐乏を続けて行く外ありません。御存問で少しは心力を取り戻したいと思つてゐます。何れ又。

㊹一九四九年七月二五日書簡

〔葉書表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 七月二十五日 北海道滝川町 滝川化学工業会社、白滝荘 水谷良一」

七月五日 滝川化学工業の総会に依つて役員に選任せられ、十日当所での役員会に依つて常務取締役となり、事業所をも預る身となりました。外国に行ったときの外減多に東京を離れなかつた小生も石狩の原野で都を思ふ身の上です。札幌に週二回出るのが本屋廻りの唯一の機会ですが、札幌は文度の低いこと驚くに堪へたものです。即日滝川に帰つてしまいます。人、石、時代の滝川の施設はそれほど快適です。炭田近い平原ですが、空気はきれいで

木の葉、草花の色は鮮かで目に快く映ります。

㊺一九四九年八月七日書簡

〔葉書表〕「京都市外向日町上植野 寿岳文章様 〆北海道、滝川町滝川化学、白滝荘 水谷良一」

御葉書拝見。北海道一ヶ月の生活緊張のせいか、却つて一週間位の感じしか出ません。十数日前自宅から貴著転送の報に接しながら未だ入手せず鶴首してゐます。明八日夕当地発一旦帰京、二十日前後再び渡道。勿論その後も東京と北海道を往還しますが、本拠は当分こゝです。冬をたのしんでまっています。当分関西にはゆけません。一度八月下旬渡道如何ですか。